

中世曹洞宗切紙の分類試論（二十一）

—呪術・祈禱關係を中心として—

石川力山

一、はじめに

道元下の日本曹洞宗は、その三代及び四代目頃の法孫から全国的な教線の展開を見せるようになり、日本の各地に拠点となる寺院を建立して戦国期から近世にかけての爆発的な寺院建立の基盤を形成したとされる。すなわち、道元下三代目の瑩山紹瑾（一二六四～一三二五）は能登に総持寺を建立し

て、ここは瑩山派展開の拠点となつたが、その門下に明峰素哲（一二七七～一三五〇）・峨山韶碩（一二七五～一三六五）の二俊足がおり、特に峨山の門下からは五哲、あるいは二十五哲と呼ばれるような多くの逸材が輩出して、彼らが開創した寺院は、後世「総持寺直末三十六門」と総称され、本山総持寺及び全国の末派寺院をつなぐ紐帶の役割を果した。今日、単独教団としては最多の寺院数を擁する曹洞宗教団の、寺院そのものの建立の八・九割は、戦国末期から近世初頭のものであるが、その基盤となる各地の拠点（後に中本寺や僧録・触頭

寺院となる）は、時期的には明峰や峨山とその門下の時代に建立されたものであつた。そして、こうした教団展開を支えた要因としては、追善儀礼や葬送儀礼の導入とともに、道元の頃には見られなかつた神仏の庇護を期待する加持祈祷的因素、密教的傾向を増したことなどがあげられる。

確かに、道元の著述を通して見る限り、その禅や宗教が民衆的支持を得て一般化するといった性格のものは思われないが、追善供養的要素が道元の禅に全く無かつたわけではなく、たとえば上堂という禅宗的儀礼の形式による、新しいあり方で行う追善供養儀礼はあり得た。⁽¹⁾また葬送儀礼は、禅宗の「尊宿葬法」や「亡僧葬法」を継承したもので、特に精神的には修行途上で遷化した「亡僧」の葬儀法が在家の葬法に応用されたと考えられるが、具体的な儀礼は、禪僧の臨終儀礼をも含んだ葬法が、たとえば北条時頼や時宗などの上級武士層の受容するところとなり、それが次第に民俗儀礼や民間信仰的要素を巻き込みながら、民衆の間へ広まつていつたも

の⁽²⁾で、中世では浄土教の臨終儀礼の流れを汲む葬法とともに、急速に一般化していったものである。

これに対して、禅宗と密教という問題は、栄西や円尔などの兼修禪者として性格付けられる諸師にとつては必然的な結びつきであったが、道元の禪の密教化という方向は極めて不自然なもので、その意味では大きな転換であったと見てよい。しかし、曹洞宗の祈祷的要素の導入は、道元滅後間もなく、その直弟の懷奘（一一九八—一二八〇）や徹通義介（一二一九—一三〇九）によつてその端緒が開かれたとされる。⁽³⁾そしてこの傾向を一層押し進めたのは、瑩山・峨山の師資であった。この師資は永平寺下の禪を学びながら、また京都東福寺などを中心とする五山派の禪も併せ修しており、その意味では状況的には栄西・円尔以来の伝統を承けた台密の系譜に連なるとも考えられる。しかし、本稿で紹介する限りでの曹洞宗における密教受容、咒術・祈祷的傾向の実態は、「一返消災咒」のように明らかに天台系のものもあるが、台密か東密か、はたまた雑密かも判然としがたい、極めて雑多なものであると言わざるを得ない。

以下、比較的古いものが伝えられている、「看経」「一返消災咒」「大般若理趣分会」「請雨」、及びその他のものに分けて順次紹介する。

二、各種看経類切紙

叢林における恒例的な行事儀礼に関する切紙については、すでに紹介済みで、多少論じたところもある。⁽⁴⁾この看経もその意では恒例行事的な性格を有するものであるが、「粥了諷經」あるいは「粥罷諷經」とも呼ばれる、今日の朝課に相当する誦経の儀礼は、古規ではもちろん、道元の時代にも行なわれていなかつたもので、道元滅後に懷奘の命を受けて京都や鎌倉の禪刹を觀察し、さらに宋國にまで渡つてつぶさに叢林の伽藍と規矩を見聞し、永平寺の規矩の整備につとめた徹通義介により導入された儀礼である。『三祖行業記』によれば、「四節礼儀、初後更点、粥罷諷經、掛搭儀式等礼法、悉師所調行也」（『曹全』史伝下、八頁）とある。その内容は伽藍護持等とともに仏道修行の円成も併せ祈願するもので、後には三時諷經にまで拡大される。

またこの儀礼は仏殿で修される公の行事であるが、看経の儀礼には、単独で個別の仏菩薩や念持仏を定め、個々に祈願をなす儀礼もある。そこでまず、仏前看経の前提ともなる「焼香」の礼法に関する切紙としての、「仏前焼香之儀式」という切紙であるが、これは原則的には仏殿における釈尊礼拜を意味していると同時に、焼香の心構えに関する一般的の領解も意味している。石川県永光寺所蔵のもので、天正頃の書

写にかかる広沢長老所伝のものを掲げる。

仰山昏鈎鏡素統相曰、問者鈎鏡、答者素統以レ鉄曲成、是鈎言
銘、無舌鏡言

（端裏）燒香儀式

仏前燒香之儀式

右唐太宋宝慶元年丁亥九月十八日、明州天童景德禪室堂頭如淨

附道元畢、伏乞、謹奉祝延、

本尊正面三足思惟耳。○燒香、戒香、定香、惠香、解脱香、退位合掌、展坐具大展三拜、三々九拜中誦唱三帰依、上来七仏我本師釈迦牟尼仏大士薩埵、大慈大悲廣大靈感、觀世音菩薩、大轉輪王小轉輪王靈台、周遍法界供養等、無二無別無斷故、三拜功德、一拜為

先天地先真仏祖、二拜三国伝灯仏祖、三拜今天地間今上皇帝上

窮万歳ミツマツサヘ、乃至上界諸仏、下界諸神八大金剛四大菩薩

扶桑、皆來聚會、廣沢比丘摩訶薩天、摩訶般若羅婆蜜、可讀一遍國中

消災咒、即無始無終無斷絕儀也、

謹奉誦祝、聖旦望開法、元正啓祚、每月每日、小尽廿九、大尽三十日、可莫怠慢者也、

永平開山道元和尚、二代懷奘、大乘開山義介、當山開山紹璉、

二代峨山、無際開山以來至今嫡々相承而到于吾、々今附与廣沢

長老畢、

仏子住此地即是仏受用、常在於其中、經行若坐臥畢、

臨ニ仏殿ニ二拜、礼ニ天地ヲ義也、然登ニ脚蹠ヲ時、礼ニ脚蹠ヲ、其時

脱ニ片履ヲ、是分礼レ地也、脚蹠登了リテ、礼レ天、其時冠カブル衣、是分礼レ

天、登ニ故居限キハスル時、於ニ故居限キハスル二拜也、

右毎月一度、竜天ノ看經次、又ハ先師之日ニ身心清淨ノ於ニ無レ人室ニ、坐具展其上ニ守ヲ開テ能々奉レ見、切紙ヲモ一々拜見ノ
仏祖ノ恩難有師恩難有、師不レ依争如斯大夏可レ伝、感淚流肝胆徹シラフメ可如是致セハ、如何様之更モ在リ、姿ヲ失トモ空ニ転シナカラ調ル羊ニ覺也、此信心ニ依テ、自然ニ冥加至出世可レ來、

ここでは、国王・天子の聖寿無窮を祈る「祝聖諷経」や、後述する「一返消災咒」の趣旨も踏まえた燒香儀礼の口伝という形式をとっている。
次に紹介する、駒沢大学図書館所蔵『室内切紙贍写』に含まれる「看經回向」に関する切紙は、永平寺伝来、光紹智堂（一六七〇）所伝に關わるもので、恒例の月中行事の形式をとっているが、内容は極めて私的な、室内看經に類するものである。

亦邪念悪心モ消滅ノ仏法增長メ、仏祖三宝モ不招守護加給也、
只世夏名利不祈、仏法成就一心ニ志在レハ、世福隨レ分在レ、
予ガ指南、法孫未來永劫如此一身可為建立肝要、少モ邪念悪
心、破戒無慚之心在ラバ、今生ニテモ後生ニテモ仏罰法罰、世
々生々無間地獄可隨、返々隙明モ是迄ト思不可、一切経ノ文字
サエ一世ニハ成ルマシキニ、祖々先達ノ諸話頭本位ハ終劫始劫
難窮、無智無能亦世夏万夏不如意ハ先世修行拙キ故也、悔恨正
直正法慈悲ヲ本トシ、時々能クナルヲ善知識ト知也、常ニ行座
臥、拳手動足是何物、出息入息甚麼物ソ、常ニ自性住セバ、即
仏体也、

永平住光紹叟 花押

次に、具体的な看経の例として、長岡市洞照寺所蔵の切紙
類の中から、正徳四年（一七一四）亨円所伝の「觀音看経法
切紙」、同三年「文殊看経切紙」の二種を掲げる。⁽⁵⁾

觀音看經切紙

入道三拜

次淨□葉呪 三遍

觀音三祀看經法

十大願

南無大悲觀世音

願我速智一切法

願我早得智慧眼

願我速度一切衆

願我早得善方便

願我速乘般若船

願我早得越菩薩

願我速得戒定道

願我早登涅槃山

願我速會無為舍

願我早同法性身

我若向力山々々自權折

我若向火湯々々自消滅

我若向地獄 自枯渴

我若向餓鬼々々自泡備

我若向修羅惡心自調伏

我若向畜生自得大智惠

南無大悲觀世音 一遍

南無阿彌陀仏 三遍

以下折返し
大悲咒五卷以須敬心可詠誦、

南無觀世音菩薩說^ニ大悲神咒之形貌之壯相^ヲ曰、大悲神是平等心、
是無為心、是無染着心、是空觀心、是恭敬心、是單心、是無雜
亂心、是無見取心、是無上世菩提心、是是當^レ知如是等之心者、
即^ル是陀羅尼相貌也、汝等當依^レ之修行^レ之、願以此功德、普及於
一切、我等與衆生、皆供成仏道、

十念印

光明真言——者

心性不動南——仏、忘泯三千南——仏、

仮立仮合南——仏、法性寂然南——仏、

寂而常性南——佛、妙法蓮花南——仏、

念々歩々南——仏、代々祖師南——仏、

慈父悲母南——仏、界法衆生南——仏、

願以此功德、平等施一切、

等發菩提心、往生安樂國、

次發願文唱終 三拜ス

又座禪ヲ止入次第□可也、

于時正徳四甲午曆（一七一四）

六月十六日

大嶺叟

授附

亨円上座

メヨ、

不忘呪○真文真如々 次歌云

○痴ト愚トノ浪三間ヲ過ル、智恵ノ舟五ヒト一棍□五ヒト拝

七返

亦文殊小経曰

○爾時仏告智恵明須菩提證明、智恵般若流遍、大慈大悲、本願成就、福德自在、安隱快樂、信受奉行、智恵經

次文云

亨円文殊之看經切紙
〔端裏ウハ書〕
〔文殊之看經〕

秘事

（三宝印、以下計六箇を捺す）

次淨口業呪唱也、唵シユリ／＼マカシユリ、シユ／＼リ、ソワ

力

自レ夫入ニ大禪定、二十五息ス、亦胡跪合掌シテ文殊呪 二十五返、次ニ上リ獅子印ヲ結シテ、其口ニ息ヲ入、祭文ヲ唱フ也、

其祭文云

夫文殊師利菩薩、元トレノドモリト師、権厄ニ楞嚴会上、般若智惠露、以利益トス、夫智慧般若權智也、諸佛靈根、衆生爲命根、如是以智慧劍、截断三毒無明煩腦、五台山上救度、其五台山上者、般若智慧道場也、智惠元是難海ノリ、梵官騰上成飛車、末卅比丘一念不生、則忘愛自然、階梯、梵官騰上成飛車、末卅比丘一念不生、則忘愛自然、退、智慧可為能生、沙門亨円謹白、

七難即滅、七福即生、本願成就、喚々如律令

再拜

次ニ下リ獅子印ヲ結シテ誦呪云、唵シシタマニシユソワカ

亦穢去呪、唵、バサラナウキヤタソワカ

同断

七返

正徳三癸巳ノ年（一七一三）林鐘仏道日 結制

結制

これらはいずれも、看経とはいっても密教による祈祷的意味の濃いもので、次に紹介する、洞照寺所蔵享保十四年（一七二九）悦堂所伝の「不空羣索觀音秘法」も同種のものと見なしてよい。

不空羣索觀音秘法

(三宝印)

不空印 有口伝 真言云 ラン・ア・ボ・キヤ・ビ・ジャ・ヤ・ウ

ム・ハツ・タ

右此密法者、伝教大師欲レ開ニ叡山一時、障礙多シ、然觀世音夢中授ニ此法ニ言、一切衆生有ニ願心、則修此法、我必不レ空ニ其心、欲令ニ成就ニ悲願也、汝欲レ企ニ大法之大望、先可レ修此法、我不レ空ニ汝心、速令ニ成就ニ、故開ニ叡山、不日而成、亦高野山弘法大師、欲レ開高野ニ時、修ニ此法ニ開闢云、又大閻秀吉公、伝ニ此法ニ修、遂治ニ天下ニ也、此法智積院亮雅僧正直伝也、吾宗之僧徒荷ニ負ニスル無ニ願心盡ニ故、不可レ有レ不知ニ此法、依而今授ニ与公、必ス軽々而不レ可レ伝ニ授修行未熟之輩、亦猥不レ許ニ他見ニ者也、

于時享保十四己酉天（一七二九）十二月

禪芳謹白（朱印）

秘法看経目録

一、拈香 九拜

一、心經 三卷

一、消災咒 七遍

一、文殊咒 三遍

唵アラハシヤナウソワカ

一、普賢咒 三遍

唵サンマヤサトバンソワカ

一、虛空藏咒 七遍

一、龍天咒 念一遍

唵メイキヤシヤニエイソワカ

この秘法は、切紙中に「此法智積院亮雅僧正直伝也」とあるように、智山派真言宗所伝の口訣を記したものであり、近世に至って曹洞宗の室内に取り込まれた切紙の例である。

特定の仏菩薩を本尊とする看経は、密教加持の側面からみればさらに無数の事例が出てくると思われるが、これらの密教的看経の秘法を一覧にして切紙として伝えた事例が存するので次に紹介する。京都市天寧寺蔵、延享元年（一七四四）敲天所伝「秘法看経目録」がそれで

一、禪定而三息而

十界一曰觀
三昧王昧

奉持南無龍天護法神煩惱消滅智惠增長頓悟大事無量法門

右心中觀念

延享元申子（一七四四）十一月成就日

宝泉九代

麟超万麒叟

授与敵天禪冠

というものであり、文殊咒・普賢咒・龍天咒は記されている

が、他は略されており、一連の看經秘法の基準を示したものといえよう。その目的とするところは、「奉拝南無諸天護法

の意識は形式的には継承されているが、具体的にいかなる状況でなされる看經かは不明である。

また次に掲げる「文殊師利之御相伝之秘密大事」は、後欠でその伝承は不明であるが、七仏信仰の切紙である。

師五台山文殊師利之御相伝之秘密大事

○南無信威德佛
是レ
一生之間之願惠之ザイヲ、メツス、

○ナムハウカクケイントウ
無寶王月殿
（ハクミノトウ）
是レ一度トノウレバ、一生ノアイタノ、一切

妙道音王佛
ナム ハウシソウフチ
経論
イチタウ
ン ヤウ キヤウ テ、 トノウルニ 同コト、

○南無宝勝像佛 コレ一度トノウレバ、一シヤウノアイタノ信

(端裏) 念佛之切紙

○ 南無宝王光烟施ノザイヲメツス、
ナムキヨクヲブクワエシ
○ 照佛コレ一度トノウレバ、一シヤウノアイタノ、
シャウブチ
○ 南無花香自在牛ムマコノルサイヲメツス、
ナムクワカウシサイ
○ コレヲ一シヤウノアイタニ一度トノウレバ、
イチタニ
ナム

力王佛チ
リキヲフチ
男女ニフルルザイヲメツス、
ヨトコヲソナ

○南無百億須弥 ナムヒヤクラクシニミ
コレヲ一シヤウノアイタニイ

支定佛 シテウブツ

○南無金剛堅固 コレヲ一シヤウノアイタニ

照惠散佛

右七佛名号相伝付トテ、心ヲ以テ諸罪作サバ、是外道ノ人也、リ

ヨ来ハ必ス地獄ニ入可キモノナリ、心ノ作スシテ、元トノ惡罪

ノ滅ス也、

(石川県永光寺所蔵)

この切紙もいかなる儀礼を前提にしたものかは不明であるが、「ザイ(罪)ヲメツ(滅)ス」「信施ノザイヲメツス」「男女ニフルルザイヲメツス」「セツシヨウ(殺生)ヲメツス」「地ゴクノザイヲメツス」等の願旨からすれば、中世流行の逆修供養に資する意味を有するとも見られる。

次に紹介する、寛永十七年（一六四〇）宗達所伝、小田原市香林寺所蔵の「念佛之切紙」は、

次に紹介する、寛永十七年（一六四〇）宗達所伝、小田原市香林寺所蔵の「念佛之切紙」は、

南無阿弥陀佛

先念佛者、眼耳鼻舌身六根六色六境界也、

云ワヌ、我家デノ念佛ト云フ、大地ガ鐘、足シヲシモクトナシ
タト心得ベシ、大事也、

南無阿弥陀佛

寛永十七庚辰(一六四〇)五月吉日

宗達沙門

私云、地獄ト云モ此境界在ルト可レ得、

一切経万億当也、大般若経廿八億当、大乗経廿億当、法華経三

万九千億当、

天照太神、熊野山、八幡大菩薩、十六善神、三宝荒神、三十番

神、過去現在未來地獄共爰在、

亦三界唯一心共可心得、竟畢我ニ在ル三昧、我亦不知、

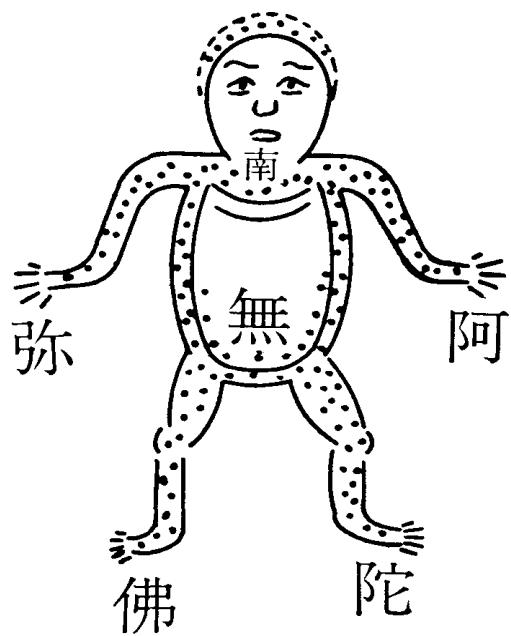
亦自円通出入圓通ト心得ベシ、

というものであるが、この場合の念佛とは、必ずしも淨土教を前提にしたものではなく、むしろ洞門的念佛觀の確立をめざしている点で、単なる念佛の口訣ではなく、阿弥陀佛を中心とする一種の看經と考えてよいであろう。

以上、多少看經の範囲を広げ過ぎた感があるかもしけないが、曹洞禪僧達によつて中世から近世にかけて行われていたと見られる、極めて私的な祈祷儀礼を、「看經」という形式で捉えることも可能であることを確認しておきたい。

三、一返消災咒関係切紙

すでに先の稿で、「三時諷經」の一として一部紹介済みの切紙類に、「一返消災咒」関係のものが二、三点あつた。⁽⁶⁾この時点では三時諷經の中に含ませて置くつもりであつたが、内容を検討してみるとそれはまぎれもなく祈祷関係の切紙であり、また中世以来の伝承を有するものであることはすでに述べたように確實であり、その後に確認したところでは種類もかなり多岐に亘るので、改めてここで取りあげ整理して



元是レワ一円相ヨリ出テ、亦此円相中ニ入ル、扱テ分ケテ見ル
ワ凡夫ヨ、扱テ鐘ヲ打テ念佛ヲ申スワ行人ヨ、夫ヲバ念佛トワ

おきたい。

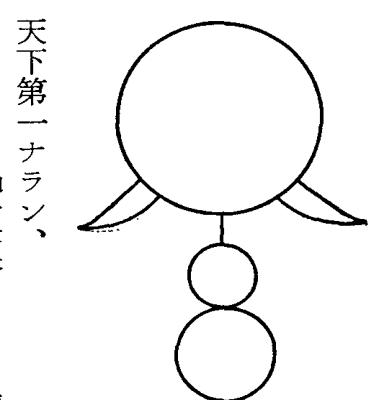
ます、「一返消災咒」とはいかなる儀礼で、曹洞宗の歴史ではいつ頃から修されるようになったかということであるが、この儀礼で誦される『消災妙吉祥陀羅尼』という真言は、詳しくは『佛説熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經』（不空訳）とある名称が示すように、熾盛光仏という除災招福に威力ある本尊の光明により、寺門の繁栄、檀越の隆昌とともに、自らの修行生活の円成を期して唱えられるもので、天台宗で重要視される四箇大法の隨一とされるから、台密よりと取り込まれた修法である。⁽⁷⁾これが曹洞宗で行われるようになつたのは前記の徹通義介が大乗寺法堂の建立に際して修したのが初出で、弟子の瑩山も永光寺法堂の建立の地鎮祭で用いられたといふ。⁽⁸⁾これらの例によつて見れば、先ず頭初は伽藍鎮護の目的をもつて修されたものであることが想像される。

そこでまず豊川市西明寺所蔵のもので、寛永二十一年（一六四四）九世鉄山天牛所伝の「一邊（返）消災咒切紙」を掲げる。

（端裏）一邊消災咒切紙

消災記文

一返消災咒之時、那行那歩之大夏ニロ傳ニ、
伏以、三世諸仏有ニ加護ニ、四時無ニ八難ニ、有ニ悉消滅ニ、降ニ諸天ニ、長壽功德常口此咒誦ヲ吉祥如意也、若シ此咒念不レ捨読者、



天下第一ナラン、

曩謨三滿多過去未來現在諸仏 母獻喃清净法身 阿鉢羅底盧舍那仏眷屬 賀多舍

不動尊仏 婆嚮嚙本師釈迦眷屬 恒姪他唵一切鬼神聞此唵字
普賢菩薩 卉尼仏 恒姪他唵悉皆合掌聽受仏言 佐佐文殊菩薩

佐咲佐咲普賢菩薩眷屬 叱叱降二十八宿 入嚙羅大通智勝仏眷屬 鉢

羅入嚙羅一切香花自在王 底瑟咤八万四千 致瑟哩金剛名

四天王 婆発吒金剛菩薩眷屬 扇底迦除障蓋菩薩 室哩曳妙吉祥菩薩
眷屬 婆嚮金剛童子 緣執金剛童子 室哩曳妙吉祥菩薩

婆嚮賀熾盛光仏本尊名号

△若此夏亂泄セイノハ者、長墮クス八万四千那羅苦地獄ハ、日々三度此咒

ヲ向ニ東西南北ニ一邊充可レ誦、從如淨禪師道元尚伝附畢、

ヘ一返消災咒ヲ云ワシ、先ヅ嫌道チワドノ家ニモ一返消災咒參ワアル、在レドモ別シテ當門徒デハ向上ノ參ニ用テ走、何ント拳スヲモ、夫レハ教法ニナシタト尽ク嫌ウ也、師云、二返三返モ誦ウズカ、何ント一返ワヨムソ、代云、良久而云、一返誦ム処デ、上有頂天下金輪水際迄デ聞エ走、師云、聞エタガ誦ムハ聞エヌ、一返ノ處デ仏眼モ拶シ走ヌ、師云、畢竟ヲ、代、師ノ

前ニ至テ燒香楫ノ如何ニモ揖ノ皈ル也、心ハ、摩訶般若波羅蜜

迄デワ教意ニ沈ムゾ、夫コデ南無三滿多ト云處デ、前仏活咒ガ

出デタゾ、夫ノ上畢竟ト云ニ、更ニ会ハ無イ、只ダ燒香ノ皈ツ

タ迄デヨ、夫コニ夏ガ在ラバ亦本ノ教意ニナルゾ、一返消災咒

ヲ誦ムワ一ト息ニヨム「デ走、ナゼ一バ、夫ノ端的ニ至ツテ

ワ更ラニ仏眼モ及ビ難イ呈ニ、諸經夏ニ此ノ心得アルベシ、夏

社ソ代レ、心得派ハ一意デ走、好クサエ心得タ郎ニハ、教意ニ

モ祖意ニモハヅレ走マイゾ、心得大夏、亦快庵派ニモ此透リ在

リ、何レモ一意ナリ、

祖師前到一心大夏

于時寛永龍集甲申年（一六四四）初冬吉日良辰

天牛合爪

吽々
入囉囉

法々
法呪

怛姪佗唵

賀多舍

阿鉢羅底

母獻喃

曩謨三滿多

消災咒記文

藏經消災咒之記文、排當
大之星辰、可行拜看、

過去現在未來之諸仏也、

清淨法身毘盧舍那仏之名号也、

盧舍那仏也、

不動明王也、

釈迦文佛也、

一切鬼神聞_チ唵之字、悉皆合掌受_二仏言_一也、

文殊師利菩薩也、

二十八宿七曜九曜也、

大通智勝仏同大眷属等也、

弥勒仏同眷属也、

八万四千金剛神之名号也、

金剛菩薩同眷属也、

四天王同眷属也、

瑟致哩

底瑟咤

婆発吒

囉囉

扇底迦

入囉囉

室哩曳

囉囉

婆婆賀

囉囉

一返消災咒之時、那行那歩之大夏口伝也、

伏以、有_ニ三世諸仏之加護_一、四時八難悉消滅、常誦_ニ此咒_一、諸

天擁護功德無量吉祥如意、是故日々三度向_ニ東西南北_一、各々誦_ル

可_ニ一返、念已不捨可_レ誦可_レ誦、

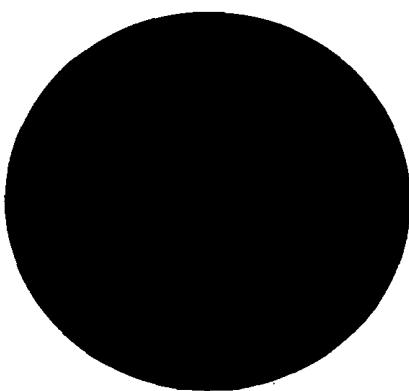
淨和尚附元和尚而嫡々相承今猶如此、

私云、那行那歩、此歩行心也、消災咒之歩行七字円成正字ト
巡ル也、七難即滅、七福即生、一円出字也、

一返消災咒切紙

先當胸合掌^{シテ}、身心一如ノ相ヲナシ、向^ト仏前^ト南無消災熾盛光王如來ト念メ、光明灌頂ノ相ヲ存シ、恒姪咤唵^{アム}ノ處ニテ、維那ノ小磬一声ヲ聞テ、左足ヨリ進ンテ卓前ニ至リ、吽々ノ處ニテ右足ニテ踏ミ止マレバ、左右合ノ十二歩ナリ、卓前ニテ香ヲ拈シ炉ニ向シテ一円相ヲ打ノ焼香シ、囁囁入囁囁ノ處ニテ転身ノ外ニ向ヒ、底瑟吒^{ミミ}ノ處ニテ左足ヨリ進ンテ本位ニ皈リ、婆発吒^{ミミ}ノ處ニテ右足ニテ踏ミ止マリ、扇底迦^{シカ}ノ處ニテ転身メ仏前ニ向ヒ合掌メ、手ヲ以一円相ヲナシテヨミ取ル也、如前進テ本位ニ皈レバ、往来ノ間自然ニ一円相ニナル^ヘ、焼香ノ時円相ト、収メ派ノ円相ト、共ニ三円相ヲ得テ、心ノ三點ヲ表ス、進モ十二歩、皈モ十二歩、流轉還滅ノ二種ノ十二因縁ノ數ニ當ル也、全體現前シ、尽十方遍法界一時ニ光明三昧ノ中ニ円現シ、消災吉祥ノ功德ヲ蒙ラシムル者、是一返一心ノ然ラシムル也、懸重ノ想ヲナスベシ、輕忽ノ念ヲ存スル「ナカレ、嫡々相承而永平室中今尚如此、

承天手書置之 花押



(端裏) 一返消災咒切紙

一返消災咒之切紙
消災妙吉祥神咒



四九) 久外嬪良より林松長老に伝えられた「一返消災咒切紙」、及びこれ以前に嬪良が量山より伝えられていた、「大事」とその口訣を含まない「消災咒切紙」の二種を掲げる。後者の方が一般に流布しているのであるが、「一返」の一は「十界」の全体、さらには「百千万億陀羅尼」に通ずるとする口訣は他にはあまり見られないものである。なお後者は「記文」の部分を省略した。

これら之外に、この咒を三返から七返とか複数回唱えるのではなく、ただ一回だけ唱えることの口訣を図示した大事とその訣、及び、「記文」を含む、永光寺所蔵、慶安二年（一六

龕謨三滿多ハ過去現在未來之諸仏也、母駄喃ハ清淨法身毘盧舍那仏ノ名号也、阿鉢羅底ハ盧遮那仏之眷属也、賀多舍ハ不動同眷属也、婆嚮喃本師釈迦文仏也、恒姪咤唵^{アム}一切鬼神此ノ唵字^ヲ、皆合掌^{シテ}受^ル仏^ヲ言^フ也、法法文殊菩薩同眷属也、法呬法呬普賢菩薩同眷属也、

吽吽降三九曜二十八宿也、并諸仏來迎ナリ、入囉囉入囉囉大通智勝仏

同眷屬也、囉囉入囉囉八囉囉一切香華自在仏同眷屬也、亦一切

光仏共有、底瑟吒底瑟吒弥勒尊仏同眷屬也、瑟致哩瑟致哩八万四千

金剛ノ名号也、婆発吒婆発吒金剛菩薩同眷屬也、扇底迦降障菩薩執

金剛童子也、室哩曳妙吉祥菩薩名号也、婆婆訶熾盛光仏本尊ノ名号也、

佛說消災吉祥陀羅尼

此咒消滅諸惡大難、万願成就吉祥大安樂大神咒也、一返十界依生無差別平等利益也、善惡無差大咒也、諸仏真實咒也、本佛

性本心妙咒大功德圓滿也、一返誦者百千万億大陀羅尼誦當也、

佛魔一般不二儀也、

左手ニテ燒香坐具ヲ右手ニ掛ケテ、右行一迺ハ善惡邪正

千時慶安二己丑年（一六四九）南呂吉日

前住洞谷久外嫗良（花押）

永光當現住

正授 林松長老畢

（石川県永光寺所蔵）

三、種々の呪術・祈禱類切紙

（端裏）消災呪切紙

一返消災呪之那行那歩大夏口伝在之、伏以三世諸仏有加護、
四時無災、八節有悉消滅、降諸天長遊功德、常口此呪
誦者吉祥如意也、若此呪須臾不措、常誦者、願望可満足也、

（中略）

右此呪、日三度講誦者、諸惡夏悉除如意可満足也、

中世曹洞宗切紙の分類試論（二十二）（石川）

附授嫗良畢

（石川県永光寺蔵）

量山（花押）

この外に、岐阜県龍泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』には、△一返消災過テ住持□護メ合掌メ円相シテ普通問訊ヲ作ス、生得、仏殿行叟ノ時キハ諸役者散堂スル故く、祝聖ノ処ニアル句面く、

という「参」も伝えられている。

「一返消災呪切紙」は、中世末頃に各派に作成される切紙の目録類には殆んどその記載があり、伽藍護持・除災招福・万願成就を期して殆んどの禅宗寺院で三時諷経中の粥罷諷経の際に誦されたものと推測され、各派の室中に共通して伝えられるようになつたものと思われる。

次に、身近な日常生活におけるさまざまな障害、生活環境の問題、及び今日から見れば怪しげな病気治療方法や加持祈祷であるが、この種の切紙を一括して紹介しておく。

(1) （端裏）難産符

南無觀世音大士 安樂產福子

封ハ伊勢トス

長尊ニ対シ鼻紙入ル、様ニシテ用也、

呑御符秘伝

白豆一粒ヲ目ヨリ二ツ割リム、片方エ伊ノ字ヲ書、片方エハ勢ノ字ヲ書テソクイニテ付合、光明真言ニテ加持ス、産婦ニ湯ニテ丸呑ニサス也、直ニ出産ス更、或ハ一日或二日也、

難産別法

大豆ヲ割リ、偏ニ伊ノ字書口ニ入、偏ニ勢字ヲ書産門ニ入ル、

有口伝、

南無乾陀天使我咒句如意成吉即説此咒、耆梨々耆羅鉢陀悉波

評、

（三重県広泰寺所蔵）

(2)

柱ニ張ル札、是ハ中ノ札に書キ様

奉修光明真言一億八万遍万德円満祈收

表ハ立テ紙テ包ス、祈禱之御札ト書ス

（三宝印）
懷中ノ守

伊勢 南無觀世音大士

安樂産福子

長四寸ニ封シ鼻紙袋ニ入ル様ニシテ

♪

呑御符秘伝

白豆一粒ヲ目ヨリ二ツニワリ、片方エ伊ノ字ヲ書キ、片方エ勢ノ字ヲ書キソクヒニテ付合ス、真言ヲヨミ産婦湯ニテ丸呑ニス、直ニ出産ス、或ハ一日、二日、

ヲコリヲ落ス法

桃ノ木ノ枝ヲ切り、病者ノ手ニ持セテ、病者ノ年ノ数桃ノ木ニ灸ス、次ニ足ノ母指ノツメト肉トノキシニ灸ス、次ニ真言ヲ誦シ水一盃ヲ加持メ与テ呑シム、次ニ五色光ノ印ヲ以テ病者ヲ照ス、次ニ金剛拳ヲ以テ五所ヲ加持ス、土砂ヲ加持シ紙ニ包ミ、蒲団ノ下ニ補キ、七印ヲ以テ加持シ、別メ五色光ノ印ヲ以テ病者ヲ照ス、真言誦ス、死スル者モ縁有バ一度ハ活ス、

前近代社会において、出産ということが共同体の運命を左右する重要な事態であったことは容易に察せられるところであります、それがまた禁忌や触穢の思想と結びついて性差別的状況を形成することもあつた。特に医療の未発達の時代の出産時のトラブルは、胎児はもとより母体そのものも運命を共にする場合が多く、共同体としてはこれが最も恐れられた。すでに紹介済みの切紙の中で、「懷胎亡者」関係のものや「母子別腹」⁽⁹⁾関係の民俗的事例に関わる切紙が古くから伝承されていたことが知られ、その折にも若干触れ、また紹介した例もあるが、右に掲げたものは難産時における対処の仕方とし

て、白豆を用いてこれを符とし、神仏習合や『光明真言』の加持まで加えて産出を無事ならしめようとしたものであり、この種の切紙にはさまざまなバリエーションが見出し得る。

真言ヲ誦シテ七印ヲ以テ土砂ヲ加持シ、石上

ノ白ラ根ヲ洗ヒキザミ、ロクシヤウノケキキ

タル錢ヲエラヒ、共ニ水ニ入レ、真言ヲ以テ

水モ加持ノ目ヲ洗フ、直下或ハ一日二日テヨ

眼病之加持

金剛拳ヲ以テ真言ヲ誦シ五所ヲ加持ス、両ノ
肩、両ノコシ、ム子ヲ加持ス、息災延命堅固
法身者也、

病身之者平

日加持
惱ノ万徳真言一切ニ不是無シ、

右大秘密口伝、書ノ以テ尔名許他見

一華藏印（印）

（三重県広泰寺所蔵）

ここに見られる「呑御符秘伝」は、前者と同じ趣旨のものであるが、これに先立つて祈祷札の護符が示され、出産だけでなく「ヲコリ」「大病」「眼病」「病身者」のためのものとしても用いられることを示し、桃の木を用いる中国伝來の習俗を取り込んだものから、やはり『光明真言』による土砂加持等の方法まで伝えている。

眼病は仏典においては、インド以来「癩」とともに重病とされたもので、あるいはここで「大病」に想定されたものは「癩」かもしれない。そしてこれらとともに恐れられたのが、精神障害であり、それは時には「狐付き」や「犬神付き」

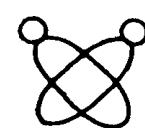
として扱われる風潮があつた。

(3)

狐付之符

南無文殊大菩薩
南無本師釈迦牟尼如來

奉請大般若本尊照頭盧神王



降伏一切大魔最勝成就

南無普賢大菩薩

阿弥陀大如來、降伏一切大魔最勝成就總持無文字、文字顯總持



俱毘盧神王魁勣魑魅魍魎國噫々如律令

此所病人ノ年ト
名ヲ書入ルナリ、

觀音大菩薩降伏一切（大）魔最勝成就由般若大悲為言離言說
右ノ札ハ、狐亦ハ諸疫病生灵死冥天狗、諸ノ付物ニ吉シ、又ハ
札守御符何モ用ル、大病ノ祈念ニワロ伝ノ通リ札四枚書テ、
四方ニハルベシ、右ノ通リ解ミ可考、大夏ミ、

（三重県広泰寺所蔵）

(4)

□クヲトシ水ニノム
唵佐羅野弩瑟鴿布羅舍耶婆婆訥

防野狐之頌

因果明々曾不昧、即今錯隨野狐疑、已前百丈山頭月、五百生前

汝是誰、

子共次鳴様ニハ其居間之上張可置、其外障礙之則比惱ル者也、

流ニ隨テクム

一、活タル者難産頼ム時、大豆一粒ヲニツニワリ、両方ニ伊勢ノ二字ヲ一字ツ、書呑也、法花ノ五巻カ八巻ノ巻ヲ書緒コトキテ頂カスル者、

（島田市静居寺所蔵）

これらはいづれも「狐付き」を中心とする、いわゆる「付き物」に対処するための守札や真言を内容とするもので、後者は子供の夜泣きまでがその対象とされ、また難産の時の対処の仕方も含まれており、これはすでに紹介したものと共通する内容のものである。

(5) 痘瘡之守 ナンテンノ実ヲ煎小量マゼアワセル、

南無三満多沒駄南鏡
南無放光王菩薩

籠 箕乙

加持

ま・だ・し・工・六・入・付

現病過消三返

病処押ス

有口伝

（京都市天寧寺所蔵）

病氣関係の切紙としては、眼病等とともに民衆生活をおびやかしたものか「流行病い」であり、これはその代表的な「疱瘡」のための加持と護符を簡略に記したものである。

(6)

（端裏）伝死病大薦

伝戸病断絶之秘言

檣ノ枝二本、其ウラヲトガラカシ、左ノ手ニ持ツ、一本ノ枝ヲ右手ニ持チ、ウラヲ楊枝ノ如ニカミ、亡者ノ塚ヲツイタル其頂上石ノ上ナリトモ、土ノ上ナリトモ、乾元亨利貞ノ五文字ヲ極真ニ書キ、書タル檣ヲ捨ルナリ、残ル一本ハ其假ニテ、亦同ク檣ノ葉六十三枚持ツ、此六十三枚ハ、檣タイツノ処ナラバ、餘ノ草木ノ葉ニテモ不苦、其葉ヲ一枚宛乾元亨利貞ノ文ヲ唱ヘテ捨ルナリ、捨畢テ一本ノ檣ニテ水ヲ亡者ニタムケ、厥檣ヲ塚ニ立ルナリ、立竟テ即厥家々ノ依□ヲ読誦スル也、

此秘言不伝則此方ニテ儀式ヲナシ、檣ノ枝ヲ向フヘ遺、塚ニ立サストナリ、是ハ他人ノ頼時ノ事ナリ、死後七日中諷誦楞嚴神咒、尊勝陀羅尼ニテ可祈禱也、回向ハ常ノ祈禱三回向ヲ用ベシ、但シ衆僧無福無難万災消滅千祥來臻ト、此文ヲ書入テ可回

南無地藏大菩薩

向也

右台家秘言相承处至今

石岑叟

貞享第五龍集戊辰（一六八八）夏六月吉旦

(府中市高安寺所藏)

(豐川市西用寺所藏)

字成就之咒廿邊、八句之陀羅尼廿一边、深ク祈念ノ淨水ヲ以テ
呑ムナリ、不^バ落二度モ三度モ呑ムベシ□□□ズ可レ落也、

永平現住仏山徳照禪師秀察和尚ヨリ伝之、

寛永十八（一六四一）五月吉日

「流行病い」として特に直接死につながる病とされたものが「伝戸病」、今日の結核であり、これはすでに特定の病原菌によつて伝染すると考えられたので、右に掲げた切紙は、死後もその墓にある種の加持祈祷を行うことによりその蔓延

この切紙は、「塚焼」すなわち墓所における亡靈の鎮魂を目的として誦される真言、及び儀礼であるが、一夜の坐禅をもつてこれに対処しようとするのは、禅的な儀礼として確立しようとしたものであろう。

ことがあり、檣の持つ民俗的意味や『楞嚴神咒』『仏頂尊勝陀羅尼』等の真言が唱えられる意味についても言及した。これは天台系の密教から取り込んだ儀礼で、恐らく修驗道などの関わりでもたらされたものと思われる。

גָּזְבֵּרְתִּים

南無我本師釈迦牟尼佛、於_ニ如來滅後_一受持此咒_一、誓度_ニ群生_二
令_ノ下_ト佛法不_レ滅久_セ中_ニ住_ラ於_ニ世_二、大_ニ穢_ヲ跡_ヲ金剛說_ヲ神通_ヲ
大_ニ滿陀羅尼_ヲ

(7) (端裏) 塚焼ヲ止ル大麦

伽字成就之咒

成就之咒
唵佐擺野弩瑟鵠布羅舍耶婆婆詞

右之咒ヲ塔

回向

我從今日不復自隨心行、不生邪見、惱慢、嗔恚諸惡之心、

十方乃至蜜、

南無不壞金剛尊

七難即滅七福即生、

心心一如

宝永二乙酉年（一七〇五）

五月吉日

透庵附与月旋

（印）（印）

（京都市天寧寺所蔵）

(11)

山下リ少シノセキナリトモコサバヨミナス可
一我先ニニシキマタラガサハタラバ

山マ云一ツシメニアルトツケ可シ

○ワワレテノマジナイ

△コウジンガイシ言ヲ知ラズシテ

薩摩国ノ五大力者ノガ子孫ナリ

○キノウミタモボウシ今日ミタモボウシ

平ウカヘテミタモサモ似タリタ

奇ノコエキケ

○トバノサトナルウリ作リ

心ナラズニ人ナウラミソ

元禄七年戊（一六九四）

八月廿八日

定信院

悟俊（花押）

附龍洞院

（上田市龍洞院所蔵）

これらはいずれも、具体的な厄災を想定したものではないが、諸佛菩薩を勧請して、仏法をして久しく住せしめ、また七難を除き招福を期する真言陀羅尼を唱えることを記したものである。中でも特に和歌が除災招福、触穢を祓う力を持つとされた、中世以来の民俗信仰をも踏まえた事例として注目される。

(12)

（端裏）虫口留大夏

庸写謬乎、字彙ニ、
庸無如是字ニ、不審、

万物虫口留供養之大夏

一、高天原仁。神留生須。皇親神漏岐。神漏美命於以天。八

百万神等乎。神集仁集賜此。神議仁議賜。

一、天津罪止波。畔乎放地溝於埋。樋於放地。敷時。串刺。生

剥。逆剥。許々太久乃。罪。天津罪登波。法別天。

一、国津罪止波。生乃腐断。死乃腐断。白人。胡美已加。母乎

犯留罪。己加子於犯流罪。母登子登。犯流罪。子止母登犯流

罪。畜於犯流罪。昆虫乃災。高津神乃突灾乎。高鳥乃災。畜

仆死。虫盜物留罪。許々太久乃罪乎。出天年。

一、如此出天波。天津宮吏乎。以天津金木。本打切。末打断立。

千座乃置。座仁置足波之天。天津管乎曾乎。本荪断。末荪切。八

針仁。取辟立。八百万乃神等。諸共仁。左男鹿乃。八乃御耳。

中世曹洞宗切紙の分類試論（二十一）（石川）

一一八

振立天^{フルイテ}○聞入止申壽^{キコエメセトマツス}

廟火消滅切紙

△死靈生靈之為ニ經ヲ誦ム時、此ノハライヲ誦ミ、後チニ尊師ノ心口入レニヨリテ何經ニテモ誦ム可シ、亦現在ノ人ノ為ニヨムモ、此ノハライヲヨミテ後チ、千經ヲ誦ム可シ、此レニハイロ／＼ノロ伝アルコトゾ、現人ナラバ、先ツヒタイニ大ト云字ヲ書キ、後ニ中ハライヲ誦ムゾ、

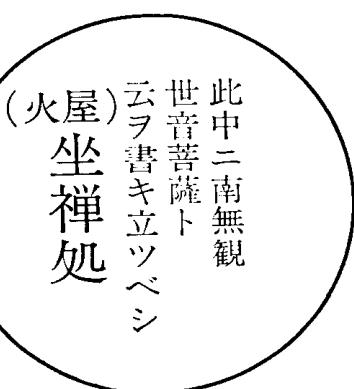
△先ツ幡ヲコシラエ、此ノ文ヲ念ヲ入書キ、心ヲ致シテ十返ハカリ念頃誦ミ、草木ナラバ其ノ上ニカケテヲクゾ、亦曰、地作りナドナラバ四方ニ此ノ幡ヲ立ルゾ、一方ハ少シアルゾ、コレハ虫ヲ追イヤル心ゾ、實ニ不思議成ル行徳ゾ、能ク可秘、此ノ外色ロ／＼ノロ伝アリ、能可レ伝、

于時宝永二乙酉歳（一七〇五）五月吉日

（印）付与日旋
(京都市天寧寺所蔵)

世間ニ多ク塔廟有レ焼、是ヲ消滅スル「沙門ノ一大夏也、要山一派之秘術、道元和尚以来ノ蜜伝」、其ノ家ノ上足亦ハ辛切ノ人ニアラズンバ、聊爾ニ不可許大夏、々々々、是ヲ消滅セハ、其廟處へ行キ、其燒クルト思フ處ヲ地上ニ一円相ヲ書キ、南無觀世音菩薩、尋声自向レ回ト三返唱、亦タ火坑變成地ト三返唱ヘテ、觀音經念彼之段ヲ一返誦了テ、其ノ内ニ急ト坐禪シ、何ニナリ共自分々ノ心得ノ古則ヲ念ジ、一サツトノ内チニモ妄念無キト思フ時唱テ云、菩薩清涼月、衆生心水ト云經文ヲ唱ヘ了テ、枝ヲ以テ廟處ヲ敲イテ云ウ、吾問^レ火主靈魂^ヲ、汝欲火亘^レ天、從^レ是必^{スシ}消滅^ニ、ト云テ良久云、仏言^ウ——亦唱テ云フベシ、寒山云、浮世幻化、如燈燼、塚内身足有リヤ、亦云、風火水地ハ是レ地水火風ト、其上亦坐禪シ少時在テ立ツトキ、一喝ヲ下シ自問メ云、為麼^ス下^ニ一喝^ヲ、自答メ云ク、喝下——口伝有リ、

これは、死靈や生靈のために誦經する際の「祓い」の祝詞をまず掲げたもので、別稿に問題にする「神仏習合」の分類項目に入れてもよいものであるが、具体的に機能する場が蝗害などの農耕社会の実生活を反映し、そこに起る厄災を除く呪術的意味を有していると考えられるので、ここに紹介しておく。



附与

仙溪

これは寺院の殿堂が火災に遭遇した際に、加持祈祷の力で消火せしめようということを内容とする切紙であるが、これまで紹介してきた諸儀礼や護符・守札が、いずれも密教や神道、あるいは民間信仰的な要素を導入して成立しているのに対し、「一円相」「観音経誦經」「古則の拈提」といった、禪宗独自の儀礼や修道要素をもつて対処しようとした点に特徴がある。特に坐禅や公案看話の禪を火災の持に持ち込んでこれを消火しようとするのも、今日的感覚からすれば荒唐無稽といえど荒唐無稽ではあるが、鎌倉末期以来、地方的展開の中で禪宗教団が地域に迎え容れられる契機となつたのが、旧来の天台や真言、さらには修驗道などの伝統的宗教的權威を越える儀礼的手段を有しているということであり、日常的坐禅修行や公案話頭の拈提の威力が期待される禪宗像の看板であつたことは間違ひなく、これを反映したものであることは興味深い。

四 「大般若会」関係

多くの僧衆を集め、唐の玄奘訳の『大般若波羅蜜多經』六百巻を転読して、諸種の祈願法会を行うのが大般若会である。わが国では、古写経の存在から推測するなら、八世紀頃から『般若經』読誦法会の信仰が継続的に盛行し、その願旨も、大寺大社の年中行事として国家行事的性格を帶びて行わ

れた國家の安寧鎮護を祈祷する儀礼から、個人の書写活動を通じてなされる現世安穩・菩提追修を祈願するものまで、さまざまな目的をもつて各大寺で行われた。平安期以降になると、石清水八幡宮や熱田神宮、春日社等にも『大般若經』は常備されるようになり、天台・真言両宗においても取り入れられ、中世以降は禪宗においても行われるようになつて、願旨も天災地変、疫病払い、飢饉等の除災招福から、村落における虫送りや疫靈鎮送などの農耕儀礼の一一種の民俗信仰としても定着するにいたつたものである。⁽¹⁰⁾

この「大般若会」の儀礼が道元教団の初期に於て行われていた事実は、少くとも道元在世中には見られない。永平寺二代懷奘の命を受けて伽藍の整備とともに儀規の整備も併せ行った徹通義介により、道元の時代には行われなかつた粥罷諷經が導入され、「一返消災咒」の祈祷も行われるようになつたらしいことはすでに触れたが、「大般若会」もこの時点を取り入れられていたかどうかは不明である。しかし、義介の資で能登に永光寺・總持寺等の諸院を開創し、その後の曹洞宗宗教団の全国的な展開の端緒を開いた瑩山紹瑾の時代に行われるようになつたことは、『瑩山清規』にすでに「大般若結願疏」が収録されていることによつて明らかであり、『洞谷記』正中元年(1324)七月九日・十日の条には、⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

十日、新命以下衆僧転読、洞谷開題、委曲宣說般若、

(『曹全』宗源下、五一三頁)

二辺返ヨム

とあり、転読も行われていたことも知られる。この『大般若波蜜多經』の第五百七十卷目が、通称「般若理趣分」と呼ばれる部分で、「大般若転読」の儀礼の際に、導師によつて読誦される。『理趣分』はまた不空によつて単独の『般若理趣經』として翻訳されており、真言宗では具名『大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』が朝課等の勤行に用いられ、曹洞宗においても大般若の転読に代るものとして広く読誦祈禱されることになった。次に紹介するのは、島田市静居寺所蔵の「理趣分切紙」で、『理趣分』の読誦の仕方を示したものである。

〔理趣分切紙〕

大般若波羅蜜多經卷第五百七十八

第十般若理趣分

如是我聞、一時薄伽梵、妙善成就、一切如來、金剛住持、平等性智、種々希有、殊勝功德、已能善獲、一切如來、灌頂寶冠、超過三界、已能善得、一切如來、遍金剛智、大觀自在、已得円

○善星皆来惡星怨敵退散

竟空寂、平等性印、於諸能作、所作事業、皆得善巧、成辦無
餘、一切有情、種々希願、隨其無罪、皆能滿足、示能調伏、一
ギヤウ

理趣分看經作法、燒香三拜、次、取經偈三辯、次心經三卷、又
八一卷、次開經偈三辯、次大般若波羅蜜多經卷第五百七十八ヨ

次三、納慕薄伽筏帝鉢刺壊刺壊波囉彌多曳タジ姪他室曬曳シツレイ々々々々々
々々々々々 細莎ソフ訶、次末一折前ノ中、諸仏菩薩、常共護持、令
一切時、善增惡減、於諸仏土、隨願往生、乃至菩提、不墮惡

一切時、善增惡減、於諸佛土、隨願往生、乃至菩提、不墮惡趣、諸有情願、受持此經、定護無辺、勝利功德、我今略說、如

是少分、時薄伽梵、說是經已、金剛手等、諸大菩薩、及餘天衆、聞佛所說、皆大歡喜、信受奉行、終、大般若波羅蜜多經

リ三陀羅尼迄読畢、転經六邊、此中二處ノ偈ヲ諷誦ス、口伝在
リ、次ニ十六善神ノ各号ヲ称スルコト一辺而、善神ノ真言諷誦

シナガラ転經六邊如前、次ニ不動真言、次ニ諸佛菩薩ト在ル処

ヨリ終迄読畢リ、善星皆來ノ偈ヲ諷誦シナガラ、転經六邊如前、

○取經偈、般若第一經、此經結縁者、雖有重業障、即必得解脱、

○開經偈、總持無文字、文字顯總持、由般若大悲、離言以言説、

「大般転讀切紙」
○諸法皆是因縁性、因縁生故無去來、無去來故無自性、
無自性故畢竟空、畢竟空故無所得、無所得故是名般若
波羅蜜、

○南無一切三寶無量廣大發阿耨多羅三藐三菩提心、

三昧王三昧

○仰願般若會中諸菩薩、伏望般若守護、十六善神、伏垂

照鑑、令歸善願、

謹白般若秘文

○此經即是諸仏一一文字○即文殊文殊文殊○化現無量身○罪

悲衆生智慧心、

宝永二己酉歲（一七〇五）

二月吉祥日

正円和尚ヨリ谷棠

伝授

△理趣分參、師云、相似般若ヲ、云、道理カ皆相似般若テ走、
師云、真ノ般若ヲ、云、所得無イガ真ノ般若テ走、師云、世尊
是三界ノ大道師テ在ルガ、何トテ十六善神ニハ守護セラレタ
ソ、云、說ク底ハ皆道理テ走、師云、守護不入ヲ、云、無心無
念テ走、信岩派ニ在ル

（13）

また、『大般若波羅蜜多經』六百卷の転読の際に唱える文

言を切紙にしたものも伝えられている。この文言は『般若

經』の空思想の特徴を端的に示すものであるが、これが『般

若經』の功德効能を引き出す「偈文」的意味を持つに至つて
いる。島田市静居寺所蔵、宝永二年（一七〇五）谷棠伝受の

もので、疏の略文、及び簡単な參を伝える切紙（無題）を次
に掲げておく。

この切紙に独自の意味があるとすれば、參において経文の
一字一字が般若会上の無量の仏・諸菩薩（ここでは文殊）であ
ると受け止めることぐらいであろう。

五、請雨関係切紙

農耕文化、特に稻作農業を中心に行開してきたとされる日本食文化を支える上で、水の需要を確実に永続的に充たすことは、共同体の普遍的な願いであつた。最終的には自然界の賜り物に頼るしか術のない古代社会に於て、すでに降雨を祈る風習は自然発生的なものであつたに違いない。『日本書記』や『風土記』にすでに雨乞いの記録が見られ、その対象が雷神とされるのも自然であるが、中世になるとさらに八大竜王に降雨を祈ることが一般的となつた。呪術・祈祷関係切紙の最後に、この「雨乞い」関係の切紙を紹介しておく。

中世に主に地方に展開した曹洞宗がこうした共同体の普遍的願いに応える意味で、竜神を勧請して降雨を祈る「祈雨」「請雨」の儀礼を取り込むことは当然のことで、特に切紙では、諸龍を餌とする金翅鳥の厄災から龍を救つてやるという方法で、その見返りに降雨をもたらすことを祈願するのが曹洞宗所伝の降雨の方法の主流をなしていた。そこで、この種の切紙の典型を示す「請雨法」を、愛知県最明寺所蔵、寛永八年（一六三一）、永平寺一十三世佛山秀察（一六四一）所伝の「請雨大要」によつて見てみる。

この種の切紙には、徹通義介の相伝を伝えるものの存在も知られている。¹⁵⁾

また、その請雨の典拠を『法苑珠林』に求めて問答体での口訣を記した、やはり西明寺所蔵の「祈雨法」も次に紹介しておく。

（端裏）請雨大要

雨請之切紙大事／＼向ニ波濤拈ニ枝草ニ云、
難陀跋難陀、沙竭羅竜王、別而天竜八部、百千万億惡毒竜王、
蘋紅蓼一袈裟、這ヶ一枝草顯ニ本法、那ヶ一句子滿ニ河沙ニ、嗚呼
第一衣不レ染ニ塵垢ニ、第二花鬢不レ萎、第三不レ流ニ白汗ニ、第四除ニ
却氣、第五安ニ住本家、總而超ニ出沙熱風熱鐵三難、忽然向ニ
補陀岸上ニ安住、不退彈ニ十二曲調、歌ニ微妙音樂、声響ニ梵天、
下透ニ黃泉、以通以達、通也達也、兩俱無也、頭上無角、手脚
無爪、折角抽爪、大海波靜、湧潭水清、此是本分道理底、
頓龍頭蛇尾転如何安着、

水注、擲ニ下一枝草、咄、指ニ水面、結句云、無垢世界座宝
蓮華、唱也、私云、若在ニ東海ニ向ニ東海岸ニ擲ニ下一枝草、北方
西方同シ、夫レノノ方ニ向テ結句唱也、百日ノ旱魃ナドニ雨
ヲ請時モ、此ノ切紙ヲ以テ請衣メ、七日清淨戒ヲ持テ船ヲ乗リ
出シ、海中カ池カデ廿一边唱ル也、此外口伝伝リ、

永平現住仏山徳照禪師秀察和尚九拜、

旨時寛永八辛巳（一六三一）年五月吉日

祈雨法

珠林云、於一切衆生一起慈悲心、勸請一切諸仏菩薩、憐愍加護廻此功德、分施諸龍、若時無雨、誦詠

懺愍加護廻

此經一日二日乃至七日、音声不斷如法、必定降雨、

山云、祈雨法宣下於仏前、修供養、誦詠大雲輪請雨經上、僧數隨時處、若為三龍神授大戒、則別有其法、

秀云、若四垂辺土而得此經無便時、今依法苑珠林、聊舉

其要文、因以行之亦可也、法苑珠林第七十九祈雨篇云、大雲輪請雨經一卷略要云、佛告諸大龍王、我今當說下昔從大悲

雲生如來一所、聞陀羅尼上、過去諸仏已說威神、我今亦當隨順、

而說利益、一切諸衆生故、憐愍與樂、於未來世、若炎旱時、

能令淨雨、若水澇時、亦令止息、疫死險難皆得滅除、能

集諸龍能令諸天歡喜踊躍、能壞一切諸魔境界、能令衆生

具足安樂而說咒曰、

恒經他摩訶若引那引婆々引薩尼、一失梨帝殊羅皷弥二地履荼毗

迦羅摩鉢耶囉僧呵怛禰三波羅摩避囉闍四尼摩羅求那雞鬪蘇栗耶

波羅毗五毗摩嵐法耶師噭六婆呵禰、南無若耶一沙伽羅毘盧遮

那耶二多他竭多耶三南無薩婆佛陀四菩提薩底毘呵五、又咒曰、

怛吒怛吒一帝致帝致二闡画闡畫三摩訶摩拏四摩俱吒五毛林達羅

尼比沙六于留必那七三摩羅他八帝利曷囉闍那地師吒南九跋折囉

陁羅薩底那十跋利沙他伊呵闍浮提地卑莎呵十一、又咒曰、阿

婆何夜寐一薩婆那鉗二迷帝羅質底那三菩提質哆弗婆鉗寐那四那

羅那羅五禰梨禰梨六奴盧奴盧七莎呵八、又咒曰、

积迦羅薩底

又大方等大雲經云、佛言、若有國土欲祈雨者、六斎之日、

其王

應當

淨自洗浴供養三寶、尊重讚歎稱龍王名、善男子、四

大之性可

令變易、誦持此咒、天不降雨無是處、是

經典中有神咒故、為衆生故、三世諸仏悉共宣、

郁究隸牟究隸頭底比、頭底陁尼羯底、陁那賴底陁那僧、塔兮、

又降雨部曰、如分別功德論云、天及龍皆能降雨、何以取

別、天雨細霧下者是、龍雨麤下者是、又阿修羅共天鬪時亦

能降雨、雨有二種、有喜雨、有瞋雨、若雨和調者是歡喜

雨、若興雷電霹靂者是瞋恚雨、

八大龍王に祈雨する典拠は、通常は真言宗所伝の『孔雀王經』や『海龍王經』『大雲經』によるが、この切紙もやはり『大雲經』によりその咒を依用しており、これが曹洞宗教団の初期の頃から取り入れられたとは思われないから、徹通伝授説はやはり後世の仮託であろうが、この祈祷儀礼が村落の共同体の中で機能した実態は容易に推測し得る。切紙には、次に紹介するような真言陀羅尼だけを抜書にした、たとえば最明寺所蔵の「請雨陀羅尼」のようなものもいくつか存する。

多姪佗婆羅婆羅徒喇素路素路那伽南闍婆闍婆時毗時毗樹附
樹附佛實力故大龍王等速來於此間浮提中降注大雨遮羅遮羅只利
只利朱路朱路

（愛知県最明寺所蔵）

曹洞宗所伝の請雨・祈雨関係の儀礼が何時頃より行われるようになったのかについては、元来は国家的祭祀として行われていた儀礼の地方的伝播の歴史が明らかにされることにより、その実態を伴つてより一層鮮明になると思われる。ただし、先の稿で「授戒関係切紙」として紹介したものの中に、

地域的民俗的信仰を集めている地方毎の山神・竜神・山靈等に戒を授け、血脉を与えてこれを度脱せしめる觀念をなす切紙が存することを紹介したが、⁽¹⁶⁾曹洞宗の請雨・祈雨は、この立場の延長線上にあるもので、当時の宗教世界における地方的地域的ヘゲモニーを握る際の重要な手段、一要素であつたことは疑いない。それがいかにして可能であつたか、それまでの天台や真言、あるいは修驗道など旧来の宗教的指導を凌駕するパワーや価値転換のモメントはどのようにして形成されたのかは、また稿を改めて論することにする。

大きな要因となつたものは、従来から言われている通説にしたがえば、呪術・祈祷的要素を取り入れることにより可能になつたという。そしてその嚆矢となつたのが、永平寺三代徹通義介による「粥寵諷經」の導入であつたとされる。その意味では確かに義介の資鑑山紹瑾による「大般若祈祷」の儀礼をはじめとする「祈祷仏教」的要素の展開は、曹洞宗の歴史において確実な道筋を辿ることになる。

しかし一方、切紙伝承史の上から見るなら、叢林行事としての祈祷仏教的側面は別として、多様な要求に応じ得る呪術・祈祷のきめ細かな儀礼方法の成立は、時代的には戦国末から江戸初期にまで下ると見なければならない。切紙の現存状況からしても、室町期にまで遡れるものは皆無といつてもよい。むしろ中世における切紙伝承の重要な部分は、嗣法関係のものが中心でそれは法の伝持をいかに確実に行うかに意識が專注されたといつてもよい部分がある。南北期から室町期にかけて成立していたと見られる諸儀礼には、殆んど例外なく「参」という、当該儀礼の宗旨としての領解・位置付けを行ふための問答体による参考資料が付隨しているのが、切紙伝承としては古層を示す基準となる。本稿に紹介した諸儀礼にも、参が付されているものはあるが、おおむね儀礼執行の手順で終始しているのも、これらの切紙の成立・伝承の時期を示唆していると見てよいであろう。

曹洞宗教団の中世における展開、特に地方伝播に際しての

六 おわりに

(注) 拙稿「中世仏教における尼の位相について（上）—特に初期曹洞宗教団の事例を中心として—」（『駒沢大学禅研究所年報』第三号、一九九二年三月）参照。なお、禅宗と葬送について、拙稿「禪の葬送」（『日本学』第十号、一九八七年十二月）参照。

(2)(9) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論丸—追善・葬送供養関係を中心として（中）—」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四十五号、一九八七年三月）参照。

(3) 佐橋法竜『瑩山』（一九七四年十月、相川書房刊）参照。

(4)(6) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論（三）—叢林行事関係を中心として—」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四十二号、一九八四年三月）及び「同（五）」（同誌第四十三号、一九八五年三月）。

(5) 長岡市洞照寺所蔵の切紙は、『長岡市双書、村は北谷にあつた—長岡市村松町の中世を歩く—』（一九九〇年三月、長岡市刊）によつた。

(7) 杉本俊龍『洞上室内切紙并参話研究』（一九三八年七月、滴禅会刊）五六頁。

(8) 『洞谷記』の正中元年（一三二四）二月九日条に、「同二月九日、以鬼宿、布灑、星合日予六合日、乙丑二月萬吉日、犯土造作等吉日、法堂地引始、一衆普請、諷經、消災咒一遍、先師大乘和尚、造営新禱佳例也、云々」（『曹会』宗源下五十九頁）とある。

(10) たとえば『続日本紀』神亀二年（七二五）正月の条には、宮中に僧六百人を集め経を読誦せしめて災異除去を祈願し、天平七年（七三五）には、宮中及び大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺で『大般若会』を転読させるなど、年を逐つて盛んになつていつた。

(11) 大平寺・根津美術館等に分蔵されている『大般若經』の識語

によれば、和銅五年（七一二）十一月十五日、神亀五年（七八）五月十日、文武天皇のために書写する等の識語が存する。

(12) 『曹洞宗全書』宗源下、四四七頁。

これらの中には、「畢竟空」のように、『大智度論』卷三十に出てくる十八空に含まれるものもあるが、基本的には大乗空の論理の縁起||無自性||空を基本にした捉え方を示すものである。

(13) 柳田国男「竜王と水の神」（『定本柳田国男集』二十七巻所収）。

(14) 杉本俊龍『洞上室内切紙并参話研究』（一九三八年七月、滴禅会刊）三一八頁。

(15) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論（二十）—儀礼（授戒・点眼・施餓鬼、その他）関係を中心として—」（『駒沢大学仏新学部論集』第二十三号、一九九二年十月）参照。